

育児支援としての病児保育のあり方と看護の役割に関する検討 ～松江市における調査結果の分析より～

1) 鳥取大学医学部保健学科基礎看護学講座

2) 鳥取大学医学部保健学科母性・小児家族看護学講座

深田美香¹⁾，南前恵子²⁾，笠置綱清²⁾

Analysis of a method of sick child care and nursing role

Mika FUKADA¹⁾，Keiko MINAMIMAE²⁾，Tsunakiyo KASAGI²⁾

¹⁾ *Department of Fundamental Nursing, School of Health Science,
Faculty of Medicine,*

Tottori University, Yonago, 683-8053, Japan

²⁾ *Department of Women's and Children's Family Nursing,*

School of Health Science, Faculty of Medicine,

Tottori University, Yonago, 683-8053, Japan

ABSTRACT

We conducted a questionnaire survey to reveal what were problems of parents of nursery school children and what they needed when their children were sick. These parents wanted the community to comprehend the present difficulty in combining parenting and working, to increase the number of day care room for the sick children, and to establish the supporting system making use of such day care rooms easily. (Accepted on June 15, 2001)

Key words : sick children, childcare support, day care room

はじめに

「何度も仕事を変わった。我が子もかわいい、仕事も大切。板ばさみで非常にストレスになる」、「どうしてもなくて仕事を休んだ時、変にイライラして子どもにつらくあたってしまう」、「子どもが病気の時、どうしても仕事が休めず、保育所に連れて行ったあの切なさが忘れられない」これは、子どもを保育園に預けて仕事をしている保護者が子どもの病気のとき感じたことである。育児と仕事の両立に最も困難さを感じさせる要因は

数多くあるが、その最たるものは子どもの病気であろう。突然仕事を休まなければならない、あるいは長期に休まなければならないことへの罪悪感やストレス、そして現実的にはそのことが引き金になる解雇、あるいは収入の減少による経済的困難など様々な問題を引き起こしている^{1, 2)}。育児と仕事の両方に向けた子育て支援には個々の家族のニーズに応じた多様なサービスが必要であることはいうまでもないが、病児保育制度は育児と仕事を両立していこうとする家族にとっては、選択肢の1つとして重要である。

現在、保護者が必要と感じている病児保育施設の数是非常に少なく、利用者の要求に十分応えているとはいえない状況にある。そこで今回、松江市の保育所、保育園の保護者を対象に子どもの病気時の対処方法や病児保育に対する考えを調査し、望ましい育児支援としての病児保育のあり方と看護の役割について検討した。

対象および方法

当市保育所（園）保護者会連合会に加盟している保育所、保育園（以下、保育園とする）の保護者2230世帯に協力を依頼した。調査は、①子どもが病気のために保育園を欠席した日数、②子どもが病気の時に世話をする人、③病児、病後児保育制度の必要性および利用の意思に関する内容の自記式質問紙調査を行った。質問紙の配布および回収は、各保育園の保護者会長に依頼し、保育園毎に留め置き法により回収した。回収数は1637世帯（回収率73.40%）、そのうち有効回答1636世帯（有効回答率73.23%）を分析対象とした。なお、調査期間は平成12年10月16日～24日であった。

調査結果の分析は、世帯の園児数と病気時の対処方法、仕事継続の困難性、制度の必要性についての認識、制度利用の意思、病気時の対処希望、病後児の対処希望、それぞれについてPearsonの χ^2 乗検定を行った。ただし、クロス集計データにおいて期待値5未満が20%以下、および期待値1以上の場合のみ検定を行った。

結 果

1. 調査協力世帯の子どもの概要

全園児（N=2147）の平均年齢は、 3.33 ± 1.70 歳であった。保育園に通っている子どもが1人の世帯は1150世帯、2人は434世帯、3人は43世帯であった。年齢の分布は、4歳児がもっと多く422名、次いで5歳、3歳、2歳児であった（表1）。

1年以上在籍している子ども1532名（平均年齢 3.78 ± 1.50 歳）が1年間に保育園を病気欠席した日数の平均は、 14.97 ± 15.64 日（N=1534）であった。1年以上在籍している子どもの病気欠席日数分布をみると、4～10日休んだ子どもが最も多く622名であった。次いで多かったのは、11～20日休んだ子どもで362名であった（表2）。子どもの年齢別に病気欠席日数の平均を見ると、1歳児（N=105）が最も長く、1年間に 22.82 ± 15.94 日

表1 各世帯の園児数と園児の年齢

園児数	1人	1150 世帯
	2人	434
	3人	43
園児の年齢	0歳	90 人
	1歳	292
	2歳	347
	3歳	374
	4歳	422
	5歳	378
	6歳	249

表2 保育所を休んだ日数分布毎の園児数

保育所を休んだ日数 ¹⁾	園児数	%
0	37	2.41
1～3	212	13.82
4～10	622	40.55
11～20	362	23.60
21～30	160	10.43
31～40	66	4.30
41～50	33	2.15
51～60	18	1.17
61～90	16	1.04
91以上	8	0.52
合 計	1534	100

¹⁾ 1年以上在籍している園児が1年間に保育所を休んだ合計日数

保育園を欠席していた。短かったのは0歳児、6歳児であり、平均するといずれも10日以内であった（表3）。

2. 子どもの病気に対する親の対処方法と病児、病後児保育制度についての認識

病気時の親の対処と病児、病後児保育制度についての考えについて示した（表4）。「園児が病気の時どのように対処しているか」については、「保護者が仕事を休むことが多い」と答えた世帯が最も多く、1071世帯（66.1%）であった。その

表3 園児の年齢と保育所を休んだ平均日数

0歳 (N=8)	9.75± 8.65
1歳 (N=105)	22.82±15.94
2歳 (N=247)	20.96±19.26
3歳 (N=270)	15.74±17.28
4歳 (N=350)	14.04±15.49
5歳 (N=337)	11.79±11.62
6歳 (N=215)	9.94±10.07

他の中には「職場へ連れていく」「子どもを一人で家に寝かせ、途中で様子を見に帰る」という場合も自由記述の中でみられた。

「園児の病気のために仕事をやめたいと思ったことがあるか」については、約半数の保護者が「やめたいと思ったことがある」と答えていた。しかし、一人親家庭、経済的必要があるいは自営業などで仕事の継続は不可欠であると答えた世帯も多くみられた。

「病児、病後児保育制度の必要性」については86.2%の世帯が必要であると答えていた。「不要」と答えた世帯は、自由記述内容によると、子どもが病気の時は保護者が看るべきである、あるいは子どもが病気の時くらい保護者が仕事を休める社会環境の整備が優先である、と考えている世帯である。また、「どちらでもよい」「わからない」と答えた世帯は、自分自身は祖父母に看てもらえるから、あるいは仕事をしていないから家で看る、という理由があげられていた。

「病児、病後児保育制度利用の意思」については「場合によっては利用したい」と答えた世帯が62.3%であり最も多かった。自由記述内容によると、急に病気なりどうしても仕事が休めない時、あるいは、長期に休まなければならない時、祖父母などの都合がつかない時などに、利用したいと考えている世帯が多い。

「園児が病気時、事情が許せばどのようにしたいか」については81.1%の保護者が「仕事を休んで世話をしたい」と答えていた。自由記述内容からも発熱などの症状があるときは、可能な限り仕事を休んで世話をしたいと考えている保護者が多い。仕事を休みにくい状況としては、突発的なので職場の人に依頼したり、引継ぎをしたりすることが困難であったり、長期にわたる場合に迷惑を

かける、と考えている保護者が多かった。

「園児の病気が治りかけている時、事情が許せばどのようにしたいか」については、「病後児保育をしている施設でみてもらいたい」と答えた保護者が最も多く、50.9%であった。とくに、伝染性疾患の回復期に症状は治っているが、医師から集団生活は困難と診断され3～4日休まなければならない時、病後児保育を利用したいという希望が多かった。

3. 各世帯の在籍園児数との関連

各世帯の園児数と子ども病気時の保護者の対応および病児、病後児保育制度の認識の関連について表5に示した。

各世帯の在籍園児数と有意な関係があったのは、仕事継続の困難性認識であった(図1)。保育所に在籍している子どもが一人の場合は「仕事をやめたいと思ったことはない」保護者の方が多いが、二人の場合は「仕事をやめたいと考えたことがある」保護者と「考えたことがない」保護者はほぼ同数であった。

4. 1年間の病気欠席日数との関連

各世帯で子どもが保育所を休んだ合計日数(2人以上の場合は2人分の合計)により6群に分け、群毎に病気時の保護者の認識との関係をみた(表6)。有意な関係があったのは、仕事継続の困難性認識、制度利用の意思、病気時の対処希望の3項目であった(図2, 3, 4)。

病気欠席の合計日数が増加するほど「仕事をやめたいと思ったことがある」と答えた世帯が増加している。1年間の病気欠席日数が20日以上になると仕事の継続に困難を感じ、「やめたいと思ったことがある」と答えた人が「ない」と答えた人を上回っている。また、病気欠席合計日数の増加に伴い、「病児保育制度を積極的に利用したい」と考える人の割合が増え、「病児保育施設で見てもらいたい」と考える人の割合が増えている。しかし、全体的にみると病気欠席合計日数に関わらず、「仕事を休んで自分で世話をしたい」と答えた人が最も多かった。

5. 仕事継続困難性の認識との関連

仕事継続の困難性の認知と有意な関係があったのは、病児、病後児保育制度の必要性、制度利用の意思、病後時の対処希望の4項目であった(表7, 図5～7)。

「仕事をやめたいと思ったことがある」と答えて

表4 病気時の対処方法と病児，病後児保育制度についての認識

1. 子どもが病気の時の対処方法	人	%
1) 保護者が仕事を休む	1071	66.1
2) 親戚や知人にみてもらう	456	28.1
3) 保育所に頼む	8	0.5
4) ファミリーサポートセンターに依頼	5	0.3
5) 病気の子どもを受け入れてくれる施設	24	1.5
6) その他	57	3.5
合計	1621	100

2. 子どもの病気による仕事継続困難性の認知	人	%
1) 仕事をやめたいと思ったことがある	738	45.6
2) 仕事をやめたいと思ったことはない	879	54.4
合計	1617	100

3. 病児，病後児保育制度の必要性	人	%
1) 必要	1406	86.2
2) 不要	36	2.2
3) どちらでもよい	120	7.4
4) わからない	70	4.2
合計	1632	100

4. 病児，病後児保育制度の利用	人	%
1) 積極的に利用したい	404	25
2) 場合によっては利用したい	1009	62.3
3) 何とかできるので利用しなくてよい	163	10.1
4) 利用したくない	43	2.6
合計	1619	100

5. 病気時の対処方法の希望	人	%
1) 仕事を休んで世話をしたい	1320	81.1
2) 親戚や知人にみてもらいたい	78	4.8
3) 病児保育をしている施設でみてもらいたい	196	12
4) その他	34	2.1
合計	1628	100

6. 病後児の対処方法の希望	人	%
1) 仕事を休んで世話をしたい	439	27.1
2) 親戚や知人にみてもらいたい	322	19.9
3) 病児保育をしている施設でみてもらいたい	825	50.9
4) その他	36	2.1
合計	1622	100

表5 各世帯の保育園児数と病気時の保護者の認識の関係

		各世帯の在籍園児数			
		1人	2人	3人	計
病気時の対処方法					
1)	保護者が仕事を休む	765	275	27	1067
2)	親戚や知人にみてもらう	308	133	13	454
3)	保育所に頼む	7	2	0	9
4)	ファミリーサポートセンターに依頼	3	2	0	5
5)	病気の子どもを受け入れてくれる施設	13	10	1	24
6)	その他	46	9	2	57
		1142	431	43	1616
仕事継続の困難性					
$\chi^2=5.447$, $df=2$					
$p<0.1$					
1)	やめたいと思ったことがある	503	216	16	735
2)	やめたいと思ったことはない	636	215	26	877
		1139	431	42	1612
制度の必要性についての認識					
1)	必要	989	372	39	1400
2)	不要	27	6	3	36
3)	どちらでもよい	83	36	0	119
4)	わからない	50	20	0	70
		1149	434	42	1625
制度利用の意思					
1)	積極的に利用したい	276	114	13	403
2)	場合によっては利用したい	715	263	25	1003
3)	何とかできるので利用しなくてよい	119	40	4	163
4)	利用したくない	26	16	1	43
		1136	433	43	1612
病気時の対処希望					
1)	仕事を休んで世話をしたい	943	343	30	1316
2)	親戚や知人にみてもらいたい	55	17	4	76
3)	病児保育をしている施設でみてもらいたい	128	59	8	195
4)	その他	21	12	1	34
		1147	431	43	1621
病後時の対処希望					
1)	仕事を休んで世話をしたい	313	111	14	438
2)	親戚や知人にみてもらいたい	220	89	10	319
3)	病児保育をしている施設でみてもらいたい	581	223	18	822
4)	その他	26	9	1	36
		1140	432	43	1615

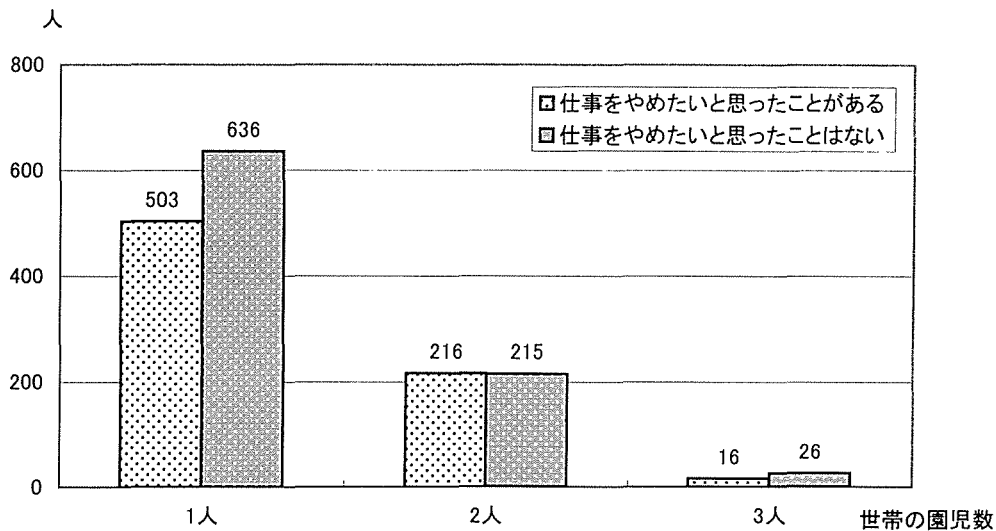


図1 世帯の園児数と仕事継続困難性の認識の関係

た人は病児保育制度を積極的に利用したい、病児保育施設を利用したいと考えている人の割合が多かった。「仕事をやめたいと思ったことがない」と答えた人は病気回復期であっても「仕事を休んで世話をしたい」「親戚や知人に見てもらいたい」と答えた人が多かった。

考 察

1. 乳幼児健康支援一時預かり事業の普及

わが国における少子高齢化は欧米諸国に例を見ない急速な現象であり、その社会的影響は計り知れないものがある³⁾。国民医療費や福祉負担の増加とそれに伴う現行の保険年金制度の破綻、生産人口の減少、消費の低下による政治、経済・社会問題など数多くの課題が指摘されている。現在の人口を維持するには合計特殊出生率2.08が必要であると試算されているが、平成11年度は1.34であり、過去最低を記録している³⁾。厚生省人口問題審議会でも少子化の対策の中核は固定的な男女の役割分業や雇用慣行の是正と育児と仕事の両方に向けた子育て支援であると報告している³⁾。そして、平成11年12月に重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画（新エンゼルプラン）の中に保育サービス等子育て支援サービスの充実として、低年齢児受け入れの拡大、延長保育、休日保育の推進、乳幼児健康支援一時預かりの推進などが平成16年度までの数値目標と共に示された^{4, 5)}。

当市の合計特殊出生率は、平成2年1.65、平成11年1.43であり、全国平均比べると若干高いものの、年々低下しており、全国的な動向を反映しているといえる⁶⁾。平成12年9月の時点で本市には1施設（乳児院に併設された病後児保育、定員4名）のみで実施されている。平成11年の利用状況は1日平均2.13人であり、稼働率は53.3%である。しかし、今回の調査によると、満員で断られたことのある人や病後児保育制度自体を知らなかった人なども多くあり、季節変動の多い利用希望を考慮した体制作りや広報活動なども必要であるといえる。平成13年4月より、病院併設型の病後児保育施設が開設される予定であり、今後、病後児保育が徐々に制度化され、利用されることが期待できる。

育児と仕事の両立をしている親の子どもが病気になったときの切実な思いは、必ずしも病児、病後児保育制度の充実だけでは解決されることはない^{7, 8)}。今回の調査結果から、子どもが病気をした時に保護者がどのようなサポートを望んでいるのか、明らかにしてみたい。

2. 保護者の望む社会的支援のあり方

子どもが病気の時、81.1%の保護者が仕事を休んで世話をしたいと思っているが、実際は仕事を休んで世話をすることができる保護者は66.1%である。子どもが病気の時、可能ならばどのようにしたいか、という質問に対して発熱など症状のあるときは仕事を休んで世話をしたい、症状は治ま

表6 世帯当りの休み日数と病気時の保護者の認識の関係

1世帯毎の園児の休んだ日数 0~9 10~19 20~29 30~39 40~59 60~250 計

		0~9	10~19	20~29	30~39	40~59	60~250	計
病気時の対処方法								
1)	保護者が仕事を休む	392	262	186	110	75	46	1071
2)	親戚や知人にみてもらう	157	121	68	42	31	37	456
3)	保育所に頼む	5	2	2	0	0	0	9
4)	ファミリーサポートセンターに依頼	2	2	1	0	0	0	5
5)	病気の子どもを受け入れてくれる施設	9	5	3	1	3	3	24
6)	その他	26	12	6	5	5	3	57
		591	404	266	158	114	89	1622
仕事継続の困難性								
$\chi^2=35.874,$	1) やめたいと思ったことがある	227	173	136	84	62	56	738
df=5	2) やめたいと思ったことはない	361	233	128	74	51	32	879
p<0.01		588	406	264	158	113	88	1617
制度の必要性についての認識								
1)	必要	505	350	228	139	104	80	1406
2)	不要	16	8	6	1	3	2	36
3)	どちらでもよい	48	30	18	12	6	6	120
4)	わからない	27	20	14	7	1	1	70
		596	408	266	159	114	89	1632
制度利用の意思								
$\chi^2=31.077,$	1) 積極的に利用したい	126	84	81	48	35	30	404
df=5	2) 場合によっては利用したい	386	258	154	93	68	50	1009
p<0.01	3) 何とかできるので利用しなくてよい	62	54	22	10	9	6	163
	4) 利用したくない	17	9	6	7	1	3	43
		591	405	263	158	113	89	1619
病気時の対処希望								
$\chi^2=25.523,$	1) 仕事を休んで世話をしたい	487	334	215	127	90	67	1320
df=5	2) 親戚や知人にみてもらいたい	34	18	10	7	3	6	78
p<0.05	3) 病児保育をしている施設でみてもらいたい	68	47	32	21	13	15	196
	4) その他	7	9	8	2	8	0	34
		596	408	265	157	114	88	1628
病後時の対処希望								
1)	仕事を休んで世話をしたい	168	113	63	41	32	22	439
2)	親戚や知人にみてもらいたい	126	91	44	22	18	21	322
3)	病児保育をしている施設でみてもらいたい	285	192	153	93	60	42	825
4)	その他	13	9	5	2	3	4	36
		592	405	265	158	113	89	1622

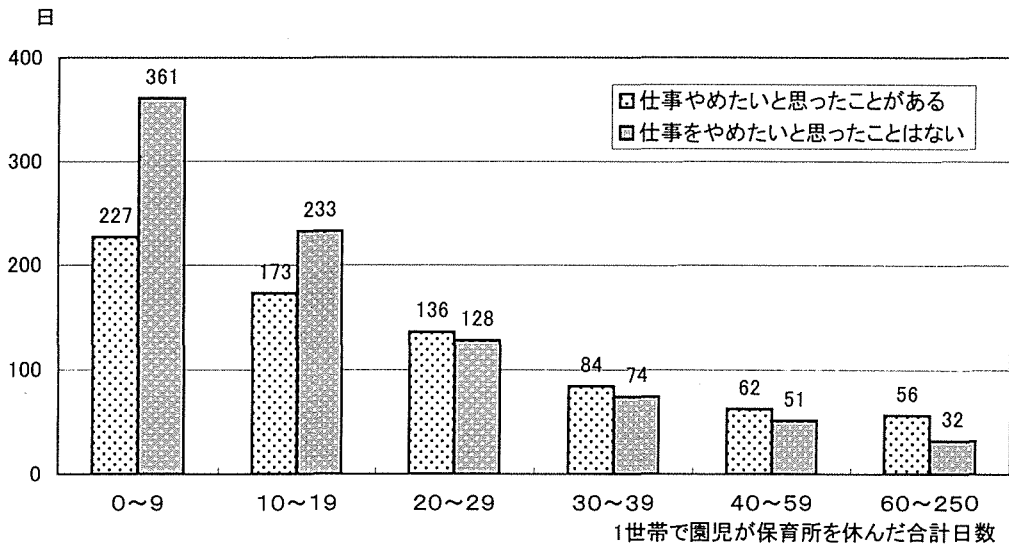


図2 世帯毎の保育所を休んだ延べ日数と仕事継続の意思の関係

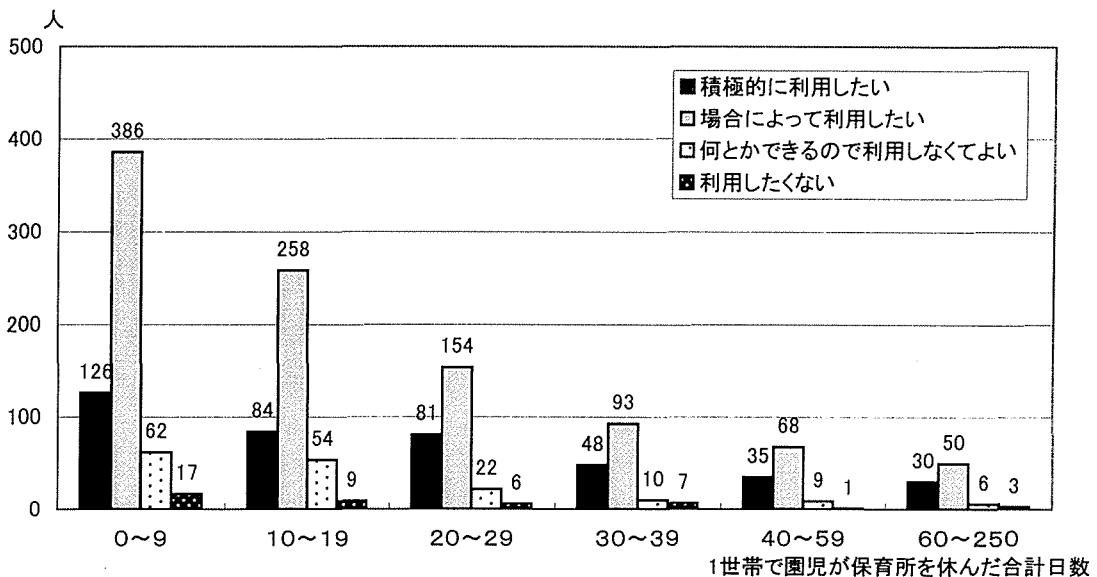


図3 世帯毎の保育所を休んだ合計日数と制度利用の意思の関係

ったが保育園での集団生活が困難な病後時には病後児保育をしている施設で見てもらいたいというのが、多くの保護者の願いである。しかし、病気であっても仕事を長期間休むことで経済的に苦しくなる、仕事を解雇されるといった切実な問題もあり、就労形態によっては子どもが病気であっても仕事を休めないという状況もある。そのような保護者は、利用しやすい病児保育制度^{9,10)}を望んでいるが、現在は病後児保育のみで、病気の時には保護者が仕事を休まざるを得ない状況である。乳幼児健康支援一時預かりには、医療機関併設

型、保育園併設型、訪問型など多様な方式が提案されているが、当市の場合は、現在、医療機関に併設された病後児保育のみ行われている。将来的には、医療機関併設型で病児保育、保育園併設型で病後児保育といった役割分担も必要になるであろう。また、現在1日単位で料金設定されているが、短時間見てもらう間に、仕事を休めるように調整できれば助かる、といった具体的な要望もあり、料金負担の面からも検討していく必要があるといえる。

一方、子どもが病気の時くらい保護者が仕事を

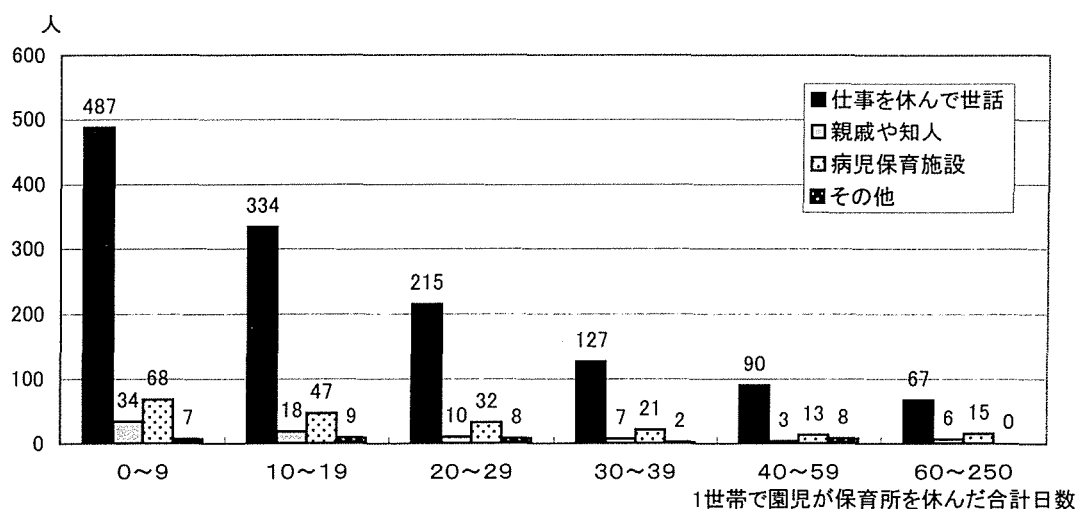


図4 世帯ごと保育所休み日数と病児時の対処希望

休めるような就労環境の整備が必要であるという意見も多くある。仕事継続との両立の困難性は、子どもの病気を理由に仕事をやめたいと考えたことのある保護者が半数近くいることから分かる。しかし、仕事を辞めることが選択肢として可能な世帯数だけで考えた場合は、園児の病気が仕事継続の困難性、葛藤を引き起こしている可能性は非常に高いと考えられる。実際に「子どもの病気で仕事を辞めた」「最初からあきらめてパートをしている」という声も自由記述の中にみられ、子どもの病気と就労継続の困難さが伺える。本調査の結果では、保育所在籍園児数と仕事継続困難性の認識には関係を認めたが、仕事継続の困難性は、単純に、世帯の在籍園児数で判断することはできない。仕事と育児の両立に思い悩んで、仕事を辞め、子どもの保育所への通園もやめた保護者については今回の調査対象には含まれておらず、また、仕事が生計をたてる上で必要であれば、やめたいという選択肢はなく、仕事と育児の両立の困難性を問う質問としては不十分であったことは否めない。

「親中心でなく、子ども中心に考えていく支援」「子ども立場にたった子育てと仕事の両立支援制度」「家庭生活と職業生活の両立のための職場づくり」といった内容が自由記述として多く記載されていた。このような保護者のニーズに応じて、新エンゼルプラン（1999年）「仕事と子育ての両立のための雇用環境整備」「働き方についての固定的な性別役割分業や職場優先の企業風土の是

正」あるいは、男女共同参画2000年プラン（1996年）「男女の職業生活と家庭、地域生活の両立支援」など具体的な施策が提示されている^{8,11)}。しかし、制度があっても一般の企業や働いている人々が正しく理解し、実現に向けた取り組みを実行しなければ意味をなさない。仕事と育児の両立は、働く女性の問題という狭い枠にとどまることなく、男性も女性もともに職業生活と家庭生活、地域生活を両立できるような社会の実現を目指す大きな流れの中で捉えていきたい。

今後、子どもが病気になったとき仕事を持つ保護者が、多数の育児支援サービスの中から選択できるだけの支援策と家族にとって最もよい方法を選ぶことができるような社会的サポートが望まれる。このような社会的な要請に看護職はどのように貢献することができるのか病児保育と育児支援の両面から考えてみることにする。

3. 病児保育、育児支援と看護の可能性

病児保育とは保育士と看護婦（士）が互いに協働し、両者の専門性を発揮しながら、保育、あるいは看護を行っていくことである。保育と看護の重なり合う部分をいかに拡大できるかが、保護者や病児にとってよりよい病児保育につながるとともに育児によりよい環境を整えることになる^{12,13)}。様々な病児保育施設、あるいは在宅において保育士、看護婦（士）、医師等の専門家の視点や知識を確実に共有し合えるようなシステム化が是非とも必要である。

子育てをめぐる家庭生活の質的変容や育児困難

表7 仕事継続の困難性と病気時の保護者の認識の関係

		1) やめたいと思っ たことがある	2) やめたいと思っ たことはない	計
病気時の対処方法				
	1) 保護者が仕事を休む	498	569	1067
	2) 親戚や知人にみてもらう	191	264	455
	3) 保育所に頼む	5	4	9
	4) ファミリーサポートセンターに依頼	4	1	5
	5) 病気の子どもを受け入れてくれる施設	15	9	24
	6) その他	22	26	48
		735	873	1608
制度の必要性についての認識				
$\chi^2=23.091$, $df=3$ $p<0.01$	1) 必要	668	725	1393
	2) 不要	15	21	36
	3) どちらでもよい	35	83	118
	4) わからない	20	49	69
		738	878	1616
制度利用の意思				
$\chi^2=65.235$, $df=3$ $p<0.01$	1) 積極的に利用したい	239	162	401
	2) 場合によっては利用したい	435	565	1000
	3) 何とかできるので利用しなくてよい	38	122	160
	4) 利用したくない	16	26	42
		728	875	1603
病気時の対処希望				
	1) 仕事を休んで世話をしたい	604	708	1312
	2) 親戚や知人にみてもらいたい	25	52	77
	3) 病児保育をしている施設でみてもらいたい	95	96	191
	4) その他	13	19	32
		737	875	1612
病後時の対処希望				
$\chi^2=35.104$, $df=3$ $p<0.01$	1) 仕事を休んで世話をしたい	185	253	438
	2) 親戚や知人にみてもらいたい	116	203	319
	3) 病児保育をしている施設でみてもらいたい	424	391	815
	4) その他	7	27	34
		732	874	1606

の諸相の議論が数多くなされている¹⁴⁾。そして、育児支援から子ども家庭支援が時代の課題となり、保育所にもその役割が求められるようになってきている¹⁵⁾。子どもを育てることの喜びや親

としての自覚などを学び、体験することを支援することの必要性が認識され始めているのである。一方、看護学においては、女性学あるいは家族社会学を基盤とした看護の方向性が模索されてい

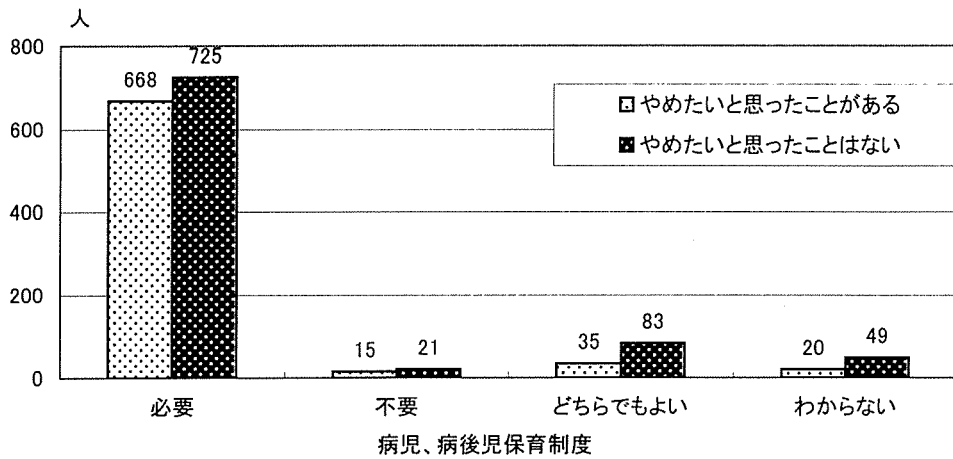


図5 仕事継続困難性の認知と制度必要性の認識の関係

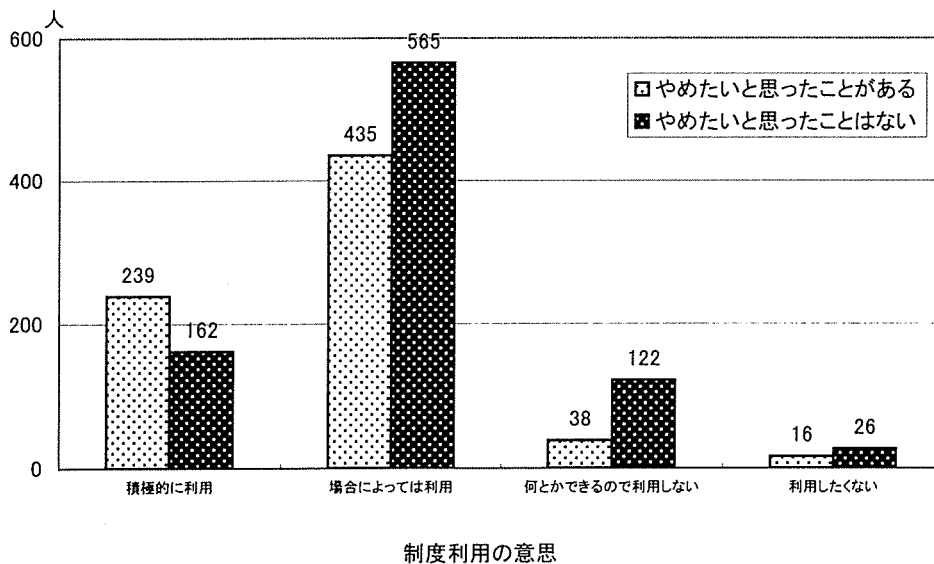


図6 仕事継続の困難性の認知と制度利用の意思

る^{17,18)}。そして、家族、社会、文化といった広い視野に立ち、現代社会のなかで、健康をどのように捉えていくのか、健康的な生活をどのように支援していくのかについて論じられてきている。現代社会において家族の健康的なライフスタイルの獲得や発達課題の達成を支援することは、子ども家庭支援、あるいは男女の職業生活と家庭、地域生活の両立支援と密接に関連している。家族の健康、女性の健康という観点から看護職として育児支援のあり方についても今後さらに検討していく必要がある。

結 語

当市保育所(園)保護者会連合会に加盟している保育所、保育園の保護者2230世帯を対象に、①子どもが病気のために保育園を欠席した日数、②子どもが病気の時に世話をする人、③病児、病後児保育制度の必要性および利用の意思に関する内容の自記式質問紙調査を行った。有効回答1636世帯(有効回答率73.23%)を分析した結果、子どもが病気の時、保護者が仕事を休んで世話をしたいと思っている保護者が最も多いが、実際には仕事を休むことは困難であると答えた保護者が多かった。発熱など症状のあるときは仕事を休んで世

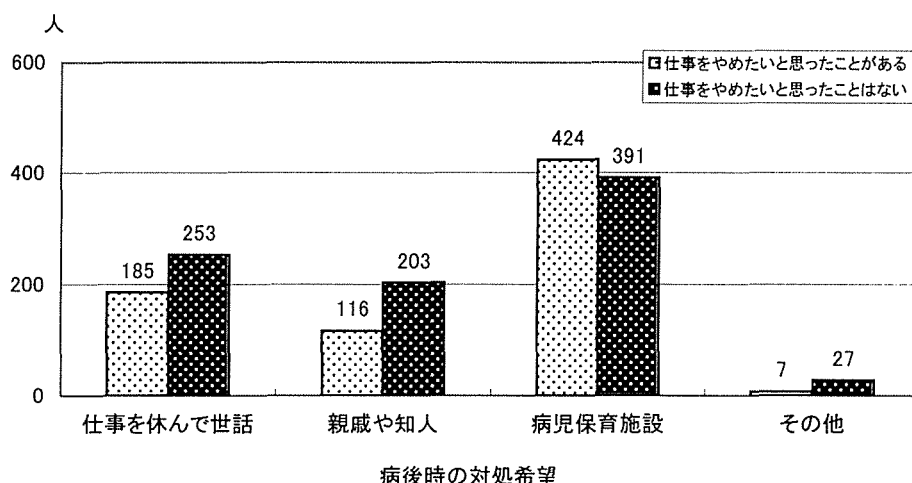


図7 仕事継続困難性の認知と病後時の対処希望

話をしたい、症状は治まったが保育園での集団生活が困難な病後時には病後児保育をしている施設で見てもらいたいというのが、多くの保護者の要望であることが明らかになった。

子どもが病気になったとき仕事を持つ保護者が、多数の育児支援サービスの中から選択できるだけの支援策と家族にとって最もよい方法を選ぶことができるような社会的サポートが望まれる。

本研究は、松江市保育所（園）保護者会連合会と共同して行った。小川清志連合会会長はじめ、23施設の保育所、保育園の保護者会長、連合会事務局村上恵子様にお世話になりましたことを感謝致します。

最後に、貴重な時間を割いて調査にご協力頂きました保護者の皆様に感謝致します。

文 献

- 1) 加藤忠明, 斉藤幸子, 庄司順一, 網野武博, 帆足英一, 恒次欽也, 帆足暁子. (1995) 病児保育のニーズとその対応, 小児保健研究 54, 96-98.
- 2) 吉中里香, 長家智子. (2001) 病児保育に関するアンケート調査結果の検討, 九州大学医療技術短期大学部紀要 28, 75-79.
- 3) 加来恒壽, 北原悦子, 村田節子, 野口ゆかり, 新小田春美, 平田伸子. (2001) わが国の少子化における諸問題, 九州大学医療技術短期大学部紀要 28, 7-12.
- 4) 藤崎清道. (2001) ヘルスプロモーション・新エンゼルプラン・健やか親子 2 1, 公衆衛生 64, 692-696.
- 5) 田中哲郎. (2001) 少子化対策としての新エンゼルプランを考える, 公衆衛生 64, 697-701.
- 6) 第五次松江市総合計画 (2001), <http://www.web-sanin.co.jp/matsue/kikaku/5/index.htm>.
- 7) 加藤則子. (2000) 仕事と子育ての両立について, 公衆衛生 64, 702-706.
- 8) 住友眞佐美. (2000) 男女共同参画社会の実現に向けて 性役割分業意識と女性労働者の実情, 公衆衛生 64, 707-711.
- 9) 網野武博, 庄司順一他. (1992) 病児保育のニーズとその対応に関する研究, 日本総合愛育研究所紀要第29集 51-64.
- 10) 帆足英一. (1993) 病児デイケアのあり方についての研究報告書—全国の病児保育室の実態—, 厚生省心身障害研究「小児有病児ケアに関する研究」班.
- 11) 総理府男女共同参画室. (1999) 男女共同参画社会の実現をめざして.
- 12) 岸本瑠美子, 富田愛子, 中嶋美都里, 福田真弓, 細谷美幸, 萬徳美穂. (1998) 母親の病児保育に対する認識と病児デイサービスの実態, 平成9年度鳥取大学医療技術短期大学部卒業研究論文集, 90-97.
- 13) 石川聡子, 河内由香, 河本恵, 松本香, 八木めぐみ. (1999) 病児保育の実態調査～鳥取島根両県における現状と課題～, 平成10年度

- 鳥取大学医療技術短期大学部卒業研究論文集, 78-85.
- 14) 船橋恵子. (1998) 変貌する家族と子育て. 佐伯胖, 黒崎勲, 佐藤学, 田中孝彦, 浜田寿美男, 藤田英典編, 岩波講座 現代の教育 ゆらぐ家族と地域, pp. 28-49. 岩波書店, 東京.
- 15) 汐見稔幸. (1998) 保育所の現代的な意味とその可能性, 佐伯胖, 黒崎勲, 佐藤学, 田中孝彦, 浜田寿美男, 藤田英典編, 岩波講座 現代の教育 ゆらぐ家族と地域, pp. 266-290. 岩波書店, 東京.
- 16) 吉沢豊予子. (2000) フェミニズムの視点をもった看護実践への挑戦. 吉沢豊予子, 鈴木幸子編. 女性の看護学 母性の健康から女性の健康へ, pp. 340-345. メヂカルフレンド社, 東京.
- 17) 鈴木和子. (1999) 家族看護学とはなにか, 鈴木和子, 渡辺裕子編, 家族看護学 理論と実践 第2版, pp. 3-16. 日本看護協会出版会, 東京.